

『多聞院日記』に現われる

伝染病の検討

中 村 昭

『多聞院日記』は奈良興福寺の子院である多聞院の住職が記した日記で、室町時代中期の文明年間から安土桃山時代の文祿年間に及んでいる。その記載の内容は仏教関係のことだけでなく、当時の世相や医療関係のことにまで触れ、具体的である。特にこの日記の大部分を記した俊英は、医師の心得もあって、僧俗の者の疾病に簡単な診断を下し、薬の調合もしていたので、当時の医療の実態を知る上で参考になることが少なくない。

この日記全体の中で疾病の名称は八十種程現われているが、今回はその中で伝染病関係の病名を取り上げ、その病名の意味、用法につき検討してみた。対象とした病名は次の通りである。疫病、瘧（オコリ）、風（風気）、傷寒、唐瘡、瘰（ハシカ）、疱瘡（疱、モカサ）、三日ヤミ、ヨコネ、

癩病、淋病。

まず、疫病とはいかなる伝染病を指しているかはもとより明らかではないが、「南ニ疫病モツテノ外増倍ノ由ノ間、祈禱ノ為……」などと用いられている。

瘧（オコリ）とはマラリアのことであるという説もあるが確かではなく、結局熱の出没する状態というほかはない。しかし、「蓮成院參籠ノ処、日オコリ煩出、薬遣ワスト雖、落チズ。」とか、あるいは「南井坊弥七郎、オコリ薬先日十二包遣ワス。二日オコリ未ダ落チザル間、又今日十六包遣ワス。」などという所を見るとマラリアかという感じもする。

風については「近日諸方老若多ク違例、殊ニ風並ビニハシカノ違例増ス。」というように流行病としての見方もされている。

傷寒が何であるかというのは大きな問題だが、「常光院去ル廿四日風氣傷寒モツテノ外大事云々」そしてその二日後、「常光院今日死去。傷寒ニテ速カニ究マル。」という記載があり、ここでは流行性感冒の如きものを指しているかとも思われる。

唐瘡は梅毒のことで室町時代末期に中国を経てわが国に伝わったとされているが、この日記にも「昨日助二郎十津川（温泉）ヨリ婦ルトテ来ル。目煩、虫気、雜熱、殊ニ唐瘡ニモツテノ外妙也ト申ス。」などと書かれている。

瘵（ハシカ）については「今春ヨリ瘵瘡並ビニ瘵モツテノ外増ス。七・八十才ノ者ニ至ルマデ病ム。小兒ニ於テハ言ウニ及バザル者也。」などという観察もなされている。

疱瘡（モカサ）についての記載は多く、「疱瘡モツテノ外増倍ス。葉五人へ遣ワス。」とか、有名人の罹病についても「相州北条氏直大坂ニ在リ、近日疱瘡煩ウ、祈禱也ト云々、遂ニ死去云々。」などとという記載がある。

三日ヤミは風疹（三日ハシカ）のことと思われるが、「世上三日ヤミハヤリ人手少ナシ、天下一同ト云々、不思議ノ事ナリ。」などという記述は興味深い。

ヨコネは性病による鼠蹊リンパ節の腫脹のことだと従来言われているが、必ずしもそればかりではないようである。

癩病については「伊賀国ノ女、廿才ノ前後ナル二人姉妹癩病ニテ国ヲ出テ、奈良ニ乞食シテ、未ダ北山へモ入ラズ

……」と書かれ、奈良の北山十八間戸が癩宿として知られていたこともわかる。また「中淨院順専房癩病ニテ湯山（有馬温泉）へ入ル、四十七日ニ及ブトモ婦ラズ。」という記載もあり、癩病の温泉療養がされていたことがわかる。

淋病は性病としての淋病のみを指していたとは言えず、「深田房淋病煩、六日ヨリ今日マデ丸塩断ニテ本復ス。」などという記載があり、ことの適否はともかく、無塩療法が行われていたことには興味を持たれる。

以上の如き疾病について、なお他の文献との比較検討も行って報告する。

（神奈川県総合リハビリテーション事業
団、七沢老人リハビリテーション病院）